

# 保育者養成における「音あそびによる音楽作品創作」への試み

仲 嶺 まり子

Approaches to “The Creation of Musical Works  
through the Activities to Make a Variety of  
Sounds” in Child-care Worker Training

Mariko NAKAMINE

## はじめに

当大学では、音楽の講義や研究会活動の発表の場として、隔年毎に「ミュージックフェスティバル」を開催している。このことは、講義の集大成としての発表だけではなく、保育者養成をおこなう上での必要不可欠な実技体験として、まず、学生自身が舞台での発表を経験し、さらにその経験を保育現場での行事等の企画運営に生かしていくということを主な目的としてフェスティバルを開催している。

もちろん、発表というひとつの目標に向かっての音楽活動への取り組みは、音楽表現技術の向上にもつながり、また、学生達の達成感や充実感も高く、毎回大きな成果を上げている。

さて、筆者は平成17年12月に開催された「ミュージックフェスティバル」において、学生達と共に「音あそびによる音楽作品の創作」に取り組んだ。音楽経験の少ない学生にとって、音と音を組み合わせるという作業は、時間のかかるものではあったが、何とかひとつの作品を作り上げることができた。以下に、これらの取り組みについて報告をおこないたいと思う。

当大学の学生の入学前までの音楽経験は、平成18年度入学者の場合、ピアノ経験のある学生は12%（注：入学前までの進度がソナチネ

程度）で、その他88%の学生は、小学校の頃にバイエルをやったことがあるという程度の初心者である。また、高校時代に音楽を履修しなかった学生も74%と多い。

そのような音楽経験の少ない学生達が、どのようにしたら楽しみながら音楽をつくって行くことが出来るのだろうか。しかも、その創作作品を演奏発表するということが果たして可能なのであろうか、ということへのひとつの試みとして、「音あそびによる音楽作品の創作」活動に取り組むことにした。

## 活動における目的

音あそびから音楽作品の創作に発展させていく過程での予想される活動において、主として次のような5つのねらいを持って取り組んだ。

### 1) さまざまな音・素材への興味

学生達は、ピアノ演奏の他に簡単な合奏等でいろいろな楽器と接しているが、身の回りの物や民族楽器に対してどのような興味関心を示すであろうか。それらを楽器（音素材）としてとらえ、その音についても自然に受け入れてくれるのだろうかなどと期待と不安を感じながら、音や形の異なるさまざまな手作り楽器や民族楽器を用意した。まずは、周囲にあるいろいろな音の存在に気づくことをねらいとした。

## 2) 楽器の音とその奏法の工夫

タンブリンや鈴などのようにすぐに音の出せる楽器と違い、身の回りの物などを楽器として利用する場合、どのような奏法でどのような音を出すことがより望ましいのかということを追求しなければならない。これらのことを通して、自身の求める音を出すことの困難さに気づき、そのことに意欲を持って取り組むことをねらいとした。

## 3) リズム型の創作

楽器の特徴を生かした個性的な音や奏法の工夫から、その楽器に適したリズムを模索し、一人一人が独自の音とリズムの世界を作り上げていくことをねらいとした。

## 4) 他楽器との呼応

ひとつのまとまった音楽作品を創作するためには、互いの音を確認し合いながら、それぞれの音を組み合わせ、全体の流れを構築していかなければならない。すなわち、自分の担当する楽器だけではなく、他の楽器とどのように響き合えばよいのかというコラボレーションに至るプロセスでの音のやりとりを主なねらいとした。

## 5) 活動を通しての学生間のコミュニケーション

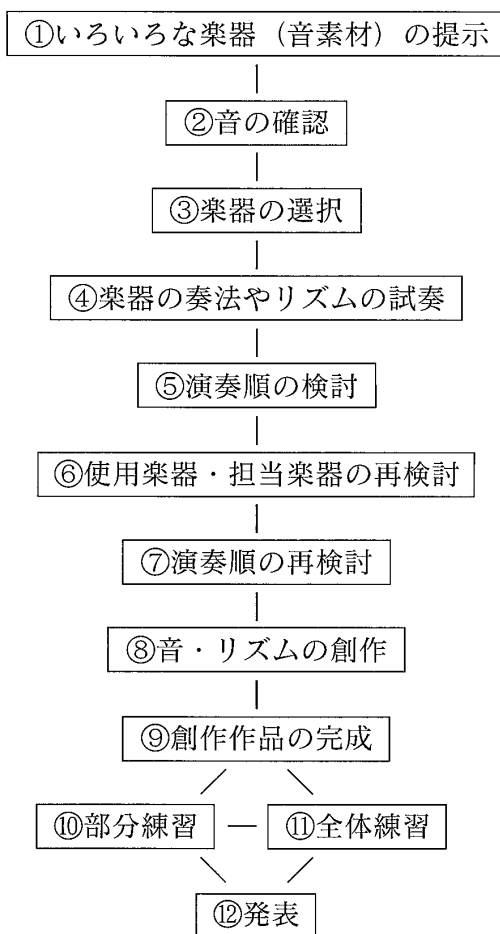
ひとつひとつの音づくりからおこなう音楽作品の創作においては、グループ全員の協力が不可欠である。しかし、常に全員が同じような気持、同じような内容で活動に取り組めるわけではなく、それらの調整や互いを補い合いながら活動を進めていかななくてはならない。そのために必要なコミュニケーションや意見交換が円滑におこなわれるよう配慮するとともに、この活動を通して学生間の信頼関係がより深まることをねらいとした。

## 主な内容

### I. 参加学生について

- ◇当大学“表現遊び研究会”所属学生を対象
- ◇2年生の希望者12名(同クラス)
- ◇学生の音楽経験の参考として、1年次のピアノ進度を表1に表記

## II. 音楽作品の創作過程



## III. 活動日程

ミュージックフェスティバルは平成17年12月24日(土)の開催であったが、実際に「音あそび」の活動にとりかかったのは、幼稚園実習(10月12日~11月2日)終了後、11月中旬であった。

研究会活動の一環としての参加であったため、授業外の全員が集合可能な曜日を話し合い、その結果次のような活動計画を立てた。

表1

参加学生のピアノ進度(1年前後期)		
	前期(器楽曲)	後期(弾きうたい)
H1	ソナチネ	35曲
M1	バイエル・ブルグミュラー	35曲
H2	バイエル	50曲
Y1	バイエル・ブルグミュラー	40曲
H3	バイエル・ブルグミュラー	38曲

W1	バイエル	35曲
M2	バイエル・ブルグミュラー	40曲
W2	バイエル・ブルグミュラー	38曲
Y2	バイエル	35曲
H4	バイエル	30曲
M3	バイエル	35曲
H5	バイエル・ブルグミュラー	35曲

◇火曜日1限…指導教員も加わり、主に創作活動をおこなう。

◇水曜日3限…前述同様、あるいは個人および全体練習

◇金曜日1限…個人および全体練習

11月15日(火)より活動を開始し、本番までに、火曜日6回・水曜日3回・金曜日4回の各90分13回の活動をおこなったが、創作活動が充実してきた12月7日(水)頃より個人練習が活発化してきた。

<練習経過の概容>

第1回 11月15日(火)

①いろいろな楽器(音素材)の提示 ②音の確認

第2回 11月22日(火)

②音の確認 ③担当楽器の選択

第3回 11月25日(金)

③担当楽器の選択 ④楽器の奏法やリズムの試奏

第4回 11月29日(火)

⑤演奏順の検討

第5回 11月30日(水)

⑥使用楽器 担当楽器の再検討

第6回 12月2日(金)

⑦演奏順の再検討

第7回 12月6日(火)

⑧各楽器の音づくりやリズムの創作

第8回 12月7日(水)

⑨創作作品の完成

第9回~13回 12月9日(金)~12月21日(水)

⑩個人練習 ⑪全体練習

第14回 12月24日(土)

⑫本番発表

#### IV. 活動内容

##### ①いろいろな楽器(音素材)の提示

今回、特に製作時間を要した楽器はガラス琴である。5種の大きさの異なる発泡スチロールの空き箱にクッションテープを貼り、その上にガラス板を置き、木製のバチでたたいて音を響かせる仕組みである。ガラス板の厚さ、幅、長さについては、何種類かのガラス片の音を聞き比べながら検討を重ね、5ミリと6ミリ・8ミリの3種類の厚さで、それぞれの箱に3枚ずつのガラス板を用意した。今回は音階づくりが目的ではなく、いろいろなガラスの音色の違いを出すことをガラス琴作りの目的とした。このガラス琴が出来上がり、ようやくいろいろな楽器の提示が可能となったのである。

今回用意した楽器は次のような物であるが、手作り楽器に関しては、これまで研究会活動の中で製作してきたものである。この他にも孟宗竹ボンゴやパイプチャイム・パイプ笛など様々な物を製作してきた。

(1)ガラス琴

(2)樽型発泡スチロール(通称ビール太鼓)

(3)鳥の形のギロ・ステンレス盆のシンバル

(4)高さや太さの異なる竹筒

(5)アルトテナーマリンバ・バスマリンバ

(6)木の実のマラカス

(7)木片に円形の金属を付けた鳴らし物

(8)ガムラン風の音の出る鉄琴玩具

(9)チューブ

(10)ブームワッカー 1オクターブ

(11)マルチトーンタング 大・小

(12)箱だいこ 大・中

(13)数珠玉を入れた箱(波の音の効果音)

(14)ボールだいこ(台所用品)

(15)シェイプたいこ

まず、音楽教室に並べられた様々な楽器を見て、学生達は驚きの声を上げた。変わった形、カラフルな物から自然素材の物まで、さながら雑貨屋店のような風景である。

「先生、これ音が出るの?」「どんな音?」「どんなにしたら音が出るん?」と次々に質問してくる。しばらく友達と楽器を手にとってな

がめたり、音を出しておもしろがっていたものの、いくつか触っていくうちに「これをどうやってみんなで演奏するんですか？」と不安そうに質問が出されたため、「これらの楽器を使っての音楽作品創作（5分程度）」について以下のような簡単な説明をおこなった。

それぞれが希望する楽器を選択し、その選択した楽器を組み合わせながら、リズムを中心とした作品の創作をおこなうこと、しかもその創作作品を演奏発表するという事について説明すると、そのことに対して「音あそび」そのものの興味や楽しさへの期待が一変し、自分たちにやれるのだろうかという不安な気持ちになった様子であった。「音あそび」という楽しそうな言葉に惹かれ希望したが、思っていたより難しそうだと感じたようである。

しかし、「先生！私たちにできるかな？」「なんかおもしろそうやからやってみよう！」等の意見も出され、とにかく他の演奏グループとは違うユニークな音楽を創ろうという取り組みが決まった。

## ②音の確認

前述の①～⑮までの楽器をひとつずつ演奏し紹介した後、学生自身の興味を持った楽器の音出しを自由におこなった。友人と一緒にひとつひとつの楽器を恐る恐るあつかいながらの音色の確認には、思っていたより時間を要した。

## ③楽器の選択

前述の楽器の紹介を参考に各自で音の確認を繰り返しながら、それぞれがやってみたい楽器をまず2つ選択するようにした。各楽器については、複数用意していたため、選択された楽器は予想していたより種類が少なかった。

まず、ガラス琴・樽型発泡スチロール（通称ビールだいこ）・竹筒・木の実のマラカス・木柀鈴・ガムラン玩具・ブームワッカー・マルチトーンタング・チューブが学生達によって選ばれた。

## ④楽器の奏法やリズムの試奏

最初のうち学生達はなかなか思い切って音を出すことができず、少し鳴らしてみても、「こんな音でいいのだろうか？合奏に使えるんだろ

うか？」などと考え込んでいる様子であった。

そこで、連続して音を出したり、深い音を出す打ち方の工夫、あるいは強弱をつけてお話をするような表現でなどとアドバイスをおこない、それぞれの楽器にできるだけ早く慣れるよう指導した。

少しずつ音がつながり、簡単なリズムパターンや表情がつけられるようになると、学生達も嬉しそうに音出しを続けていた。また、同じ楽器同士では、交互打ちや互いに声を掛け合いながらリズムを取り合う姿も見られるようになり、徐々に音も大きく響くようになってきた。

## ⑤演奏順の検討

まず、A1—B—A2という構成で、楽器編成と演奏順の考案をおこなった。

A1部分では、徐々に楽器を増やしダイナミックさを出して行く。B部分では、A1と全く音質の異なった楽器グループで演奏する。最後のA2部分では、楽器編成はA1を基本にするものの、終結部では次第に静かに曲の終わりを表現する。という全体の流れを確認すると共に、各楽器の音聞き合いながらA、Bグループの楽器編成について話し合った。

はじめは不思議な音から始めたいという意見が出され、チューブの演奏から始めることにした。

<チューブの音>が消えると同時に、竹筒の<トガトン>が鳴り始め、<ガムラン玩具>→<木の実のマラカス>→<木柀鈴>の順に音が加わって行く。次にそれらと交替で、<ビールだいこ>が力強く始まり、さらに<ブームワッカー>が加わりA1をダイナミックに終わる。次のB部分では、ガラス琴の演奏を中心にし、A1部分との音の違いを強調する。という計画を立てていったのだが、A1がダイナミックに終わった後のガラス琴の演奏は、返って音量不足が感じられ、他楽器を加えたり、ガラス板の数を増やすなどいろいろな演奏形態を試みたが、結局、効果的な演奏をおこなうことができなかった。

さらに、A2部分では、A1部分の楽器にマルチトーンタングを加え、各楽器の順序やリズム

ムパターンを変えたり強弱変化を工夫したが、音のつながりが不自然だったり、A1部分との違いや曲の終結部分が思うように表現できず、創作を続けることが非常に困難な状況になっていった。

各部分での楽器編成は、音質の合う物が選ばれており、そのような点では特に問題はないように思われたが、思い切って使用する楽器および演奏順の再検討をおこなうことにした。

#### ⑥使用楽器・担当楽器の再検討

当初、難しそうだという理由で選ばれていなかったマリмбаや箱だいこ・数珠玉を入れた箱などを再度演奏し、これらの音を加えることで音楽に広がりが出てくるのではないかという提案を教師側からおこなった。提示する楽器の中にマリмбаを加えていたのは、有音程ではあるが民族楽器や手作り楽器と音質が合うことと、初心者でも演奏可能と思われたことからである。学生はこれまでマリмбаを演奏したことがなく、マリмбаの演奏は難しく自分にはとてもできっこないだろうという理由から選ばなかったということであった。そこで今回、1音のみのトレモロ奏やクロマティック奏法を紹介し、少ない音でも曲作りが出来ることを説明した。また、さらにその奏法と他の楽器とのコラボレーション演奏を紹介すると、「先生、私マリмбаやってみたい！」と申し出る学生も現れた。他にも箱だいこをこすって音を出したり、数珠玉の箱で波の音を表したりして見せると、改めてそれらの音のおもしろさに気づいた様子で、これらの楽器を加えることに全員の賛成が得られた。その他、鳥の形のギロ・ステンレス盆のシンバルも加えようとしたが、担当する楽器が増えると負担が増えて大変ではないかという意見もあり、とりあえず上記3つの楽器のみ新規に追加することにした。

このような創作活動においては学生の主体性は重要であり、学生自身が取り組めるよう内容を工夫していかなければならない。しかし、より内容の充実した作品の創作を目的としている場合、時としては教師の指導的なアドバイスは必要と思われる。その援助により問題解決や発

想の転換が可能となり、個人の意欲向上だけではなくグループ全体の協働体制の強化が図れるのだと考えるのである。

特に、筆者は、活動中での問題点を正確に把握するということと、それぞれの学生が自分の担当に自信を持って取り組めるよう配慮することについては当初より留意しており、教師のその役割の重要性を改めて認識した出来事であった。

#### ⑦演奏順の再検討

新しい楽器が加わり、演奏順の再検討が始まったが、前回のA1—B—A2という形式にとられず、それぞれの楽器をいかに有効に演奏するかということについて話し合いを進めた。

そこで今度は、「ガラス琴はめずらしいので、ガラス琴から演奏を始めたらどうだろう。ガラス琴の響きが新鮮な音として皆に聞こえるのではないか」という意見が出され、ガラス琴から演奏を始めてみることにした。その次は、前案のA1を参考にして、〈竹筒のトガトン〉→〈ガムラン鉄琴玩具〉→〈木片鈴〉→〈数珠玉の入った箱〉と演奏順序が決まっていた。

そこで、この前半部分が民族楽器中心の編成のため、次にマリмбаを登場させ、箱だいこのコラボレーションにすると、民族的な音楽と音型や音質が異なり、場面変化の効果があるのではないかという教師の提案と、さらに「この場面は注目されるかもしれないね」という一言に、「先生、私、マリмбаやってみたい！箱だいこは、MさんとHさんが空いてるから、やってもらったらいいと思う。」という発言がなされ、他の学生達の賛同も得て、さらにもう一人バスマリмба担当者を決め、B部分にマリмбаと箱だいこのコラボレーションが挿入されることとなった。

そうして、マリмбаと箱だいこのコラボレーションが終わると同時に〈ピールだいこ〉の演奏が始まり、さらにそれに〈ブームワッカー〉が加わり、ダイナミックなまま音を止めると、最後に〈チューブ〉の不思議な音で演奏を終了するということが、テンポよく決められていった。

創作の最初の頃は、何から始めたらよいのかわからず、まずはひとつの型に沿って創作しようと試みたが、結局完成させることができなかった。つまり、いわゆる合奏という形態と異なり、今回の創作では、音のイメージをもとにリズムをつくりながらそれらを組み合わせつなげていくという作業が中心になっているため、十分にいろんな楽器の音出しをおこなわなければならなかったのだと思う。

しかし、それぞれの楽器の音を主張しながらも、互いの音を聞きあえるようになると、徐々にではあるが学生一人一人が作品の方向性を見出し、さらにいろんな組み合わせで相互に演奏し合いながら、他楽器の音やリズムへの反応力、集中力を高めていくことで活動の活発化が図られたのである。

#### ⑧音・リズムの創作

演奏順が決まり、各楽器毎にリズムパターンの創作にとりかかった。どの楽器でも演奏しやすいように拍子は4拍子にした。長さについては特に指定せず、まず各楽器でいくつかのリズムパターンをつくり、それらのパターンの繰り返し（坪能<sup>(1)</sup>はこのような演奏法をパターンミュージックと名付けている）をおこなうことで、それぞれの楽器や全体の演奏時間の調整がおこなえるようにした。一番難しかったのは、やはりガラス琴であった。

ガラス琴は、それぞれ大きさの異なる5つの発泡スチロールの箱に並べた3本のガラス板の中から、特色のある音（他との音の違いがはっきりしている）を1、2本選び、それらをゆっくり演奏したり、トレモロ奏や交互奏等を試してみたりしながら音づくりをおこなった。特に1音奏でつなげていく時の高さの組み合わせ順がなかなか決まらず、他楽器の学生も集まり意見が交わされていた。ガラス琴の音づくりには教師も加わり進めていったが、その他にもマリンバ、ブームワッカーの音の使い方についても、教師の協力が必要であった。

#### ⑨部分練習

作品全体が完成すると、決められた練習日には全体練習がおこなえるよう、練習日以外に自主的に個別練習をおこなうようになった。

そして、「先生、発表するっていう目標があるのはいいなあ！私たち頑張るけん！」と嬉しそうに練習する姿が早朝も、放課後も見られるようになった。

#### ⑩全体練習

全員がそろって練習できるのは、決められた練習日のみであるにもかかわらず、さまざまな理由からなかなか全員がそろって練習することができなかった。個人練習やグループ練習はおこなうものの、全体練習での全員出席が一番の課題であった。

にもかかわらず練習時には、担当楽器の変更やリズムの変更などがなされ、参加学生間での意見交換が活発に行われていることを窺い知ることが出来た。

発表の日が近づくにつれ、より優れた作品にしたいという意欲の高まりが学生間の絆を一層強くしているように感じた。

#### ⑪発表

本番では、緊張はしているものの、互いに合図を送りながら笑顔で演奏する姿に、音・心・体の一体感が感じられ、学生達の努力に感激すると共に、創作という協働作業の大きな成果を確信することができた。

### V. アンケート調査の実施

今回の「音あそびによる音楽作品の創作」への取り組みについて、参加学生に以下のようなアンケート調査を実施した。

1. アンケート実施日：平成18年1月（自由記述）
2. 対象：「音遊び」参加学生 12名
3. アンケート項目および結果（25%以上を抜粋）

#### ①「音あそびによる音楽作品の創作」に取り組んでの全体的な感想

◇自分たちで最初から音を作るのが、こんなに大変とは思わなかった（42%）

◇今まで触れたことのない楽器が経験できおもしろかった（42%）

◇練習していくうちに、曲も出来てきてと

<sup>(1)</sup> 坪能由紀子「音楽作りのアイディア」音楽の友社 1995

- でもおもしろかった (33%)
- ◇それぞれの楽器がひとつになっていくのはすごいと感じた (33%)
- ◇民族的な雰囲気とパフォーマンスができ、楽しかった (25%)
- ◇本番を終えて後、充実感・達成感があった (25%)
- ②はじめて楽器を見た時の感想
- ◇民族的な音色に驚いた (42%)
- ◇「本当にこれで音が鳴るのかな」と不思議だった (33%)
- ◇いろんな楽器が珍しくおもしろそうだと感じたが、どう表現すればよいのか分からず戸惑った (25%)
- ◇ひとつひとつの楽器はすべて不思議でいい音だと感じた (25%)
- ③音を確認しながらの曲作りについての感想
- ◇演奏順がなかなか決まらず、どうやって取り組んだらいいのか悩んだり、全員の息が合わず大変だった (50%)
- ◇音と音のつながりが面白いと思い、意欲的に楽しんで取り組むことができた (42%)
- ④どんな所が楽しい・面白いと感じたか
- ◇楽器の音色は個性的だけど、それぞれがリズムと合い不思議な雰囲気で作れたこと (58%)
- ◇それぞれの楽器が、たたき方の強さによって音が変わり、音が重なると違った感じの音になったり、それぞれの個性を生かしながら作れたこと (42%)
- ◇リズムが合った時やいい音が出た時は、とても嬉しく盛り上がった (33%)
- ⑤友人との協力関係についての感想
- ◇グループ毎に音のまとまりをよくするという事に集中したので、音をチェックしたりアドバイスしたり、協力して作れたと思う (42%)

- ◇団結力ができた (42%)
- ◇なかなか全員が集まらなかったけど、一人一人が必要を実感し、協力するようになった (33%)
- ⑥ピアノや既製楽器の演奏と音あそびでの楽器演奏との違いについての感想
- ◇音あそびは、自分たちで音を作り、リズムで演奏する感じだと思うので、リズムを作り出す柔軟な知識が必要だと思う (33%)
- ◇既製曲は、楽譜に近づけようとして練習していく感じがするが、音あそびは、最初からみんなで作っていくので、協力することの重要性が学べると思う (33%)
- ◇自分で音を探して作れるので、楽しみながらできると思う (33%)
- ◇音あそびは、楽器の珍しさや想像のつかない音色で、観客にも見たり聞いたりする楽しさを与えると思った (25%)

## 考察

今回の活動を振り返って最も心に残ったことは、活動がなかなか進まず、また教師が一人一人の楽器の相談に時間を要しそれぞれの練習を中断せざるを得ない状況であっても、誰もがそのことを自然に受け入れ、決して不満を述べず協力的な姿勢を持ち続けたことである。この学生達の根気強い取り組みに支えられ、「音楽作品の創作発表」を実現できたと考えている。

また、学生達の練習を見ていると、それぞれのパートで単調なリズムを繰り返し練習することで、リズムと体が一体となったパフォーマンスがしばしば見受けられたり、楽器同士のコミュニケーションや合図のやりとり、間のとり方にも地方のお祭りでのお囃子や踊りとよく似た雰囲気が感じられ、手作り楽器や民族楽器による活動が、人間的な活動に通じているということに深く感銘を受けた。

この「音あそび」を希望した12名の学生は、同じクラスというだけではなく、筆者の主催す

る「表現遊び研究会」に所属し、イベント参加活動や保育現場訪問活動を共にこなしている。1年次からのそういった活動が素地となり、今回の活動に生かされたのではないかと思われる。

また、参加学生の音楽経験については、1年次のピアノ進度表を参考資料として掲載しているが、H2の弾きうたい終了曲が50曲と他より多い以外は、特に大きな差も見られず、進度が平均的であることも、グループ運営が円滑におこなわれたひとつの要因であると考えられる。

今回の「音楽作品の創作発表」では、(1)さまざまな音・素材への興味(2)楽器の音とその奏法の工夫(3)リズム型の創作(4)他楽器との呼応(5)活動を通しての学生間のコミュニケーションという5つのねらいを持って取り組んだが、アンケート調査の回答を見ると、「民族的な音色に驚いた」「不思議でいい音だと感じた」「いろんな楽器が珍しくおもしろそうだ」とさまざまな楽器と音への興味を持ったことが書かれており、その他の「それぞれの楽器が、たたき方の強さによって音が変わり、音が重なると違った感じの音になったり、それぞれの個性を生かしながらやれたこと」という回答の中では、楽器の音と奏法の関係の記述がなされている。

さらに「音あそびは、自分たちで音を作り、リズムで演奏する感じだと思うので、リズムを作り出す柔軟な知識が必要だと思う」というリズム演奏や創作への意識の向上が認められ、「リズムが合った時やいい音が出た時は、とても嬉しく盛り上がった」という回答に、演奏における共感を得ていたことを窺い知ることができる。グループ活動としての基礎となる学生間のコミュニケーションについては、「音あそびは、最初からみんなで作っていくので、協力することの重要性が学べると思う」や「一人一人が必要性を実感し、協力するようになった」「団結力ができた」という感想が述べられていることから、それらの重要性を十分に理解していたと思われる。

また、「音あそびは、楽器の珍しさや想像のつかない音色で、観客にも見たり聞いたりする楽しさを与えると思った」という感想に、活動に対する自信や充実感、達成感が表れていると感じた。

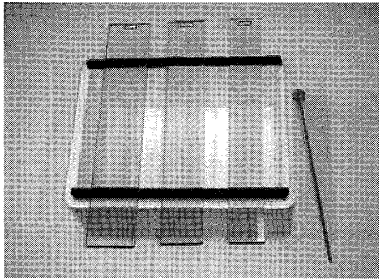
これまで筆者は、「幼児音楽」や「表現援助技術」の講義の中で、「音あそび」をしばしば実践してきたが、音素材の紹介や一時的なおもしろさの提供に終始していたと考えられる。そのため、今回の一連の活動を通して、今後の講義の中での「音あそび」の内容について、どのように計画していけばよいのかという方向性を得ることが出来たと感じている。ひとつは、今回のようにグループによる創作作品の発表の機会を設け、内容や技術的向上を図ること。さらには、表現活動においてそれらの経験を生かした楽器の利用を試みるなど、様々な企画にチャレンジしていきたいと考えている。

#### 参考文献

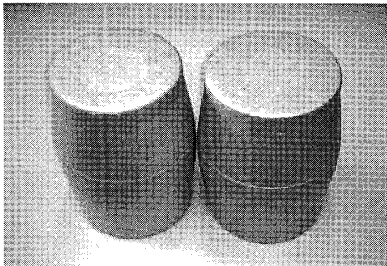
1. 安田寛・今村方子・田中照道 「子どものための音あそび集」 音楽之友社 1990
2. R・マリー・シェーフアー 「サウンド・エデュケーション」 訳、鳥越けい子・若尾裕・今田匡彦 春秋社 1992
3. 坪能由紀子「音楽づくりのアイディア」 音楽之友社 1995
4. 今村方子「保育者養成の新たな視点 ―ある音楽作品創作のための保育実践を通して―」 音楽教育実践ジャーナル vol.1 no.2 日本音楽教育学会 2004.3
5. 近藤真子「聴くことは創造すること」 音楽教育実践ジャーナル vol.2 no.2 日本音楽教育学会 2005
6. 別冊「日経Kids+」 日経ホーム出版社 2005



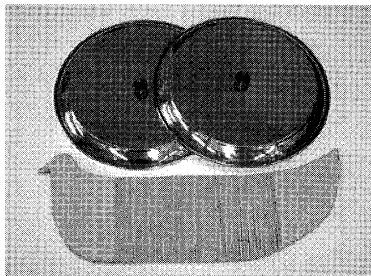
(1) ガラス琴



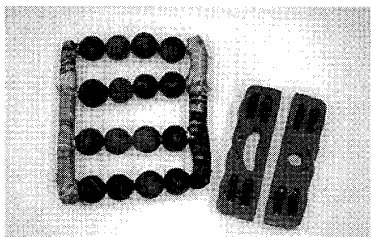
(2) ビール太鼓



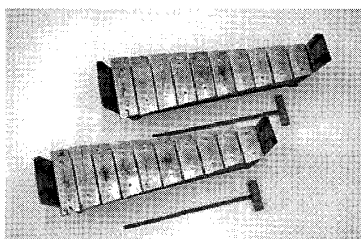
(3) 鳥のギロ  
ステンレス盆のシンバル



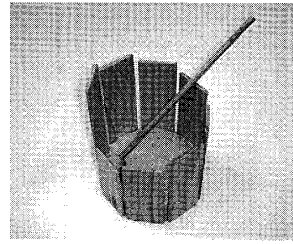
(6) 木の実のマラカス (7) 木片鈴



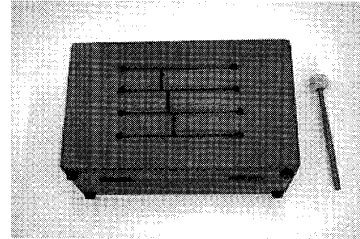
(8) ガムラン鉄琴風玩具



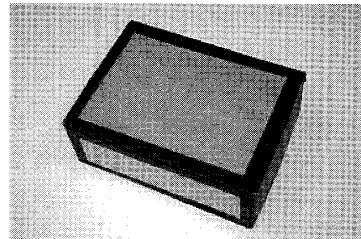
(11) マルチトーンタング



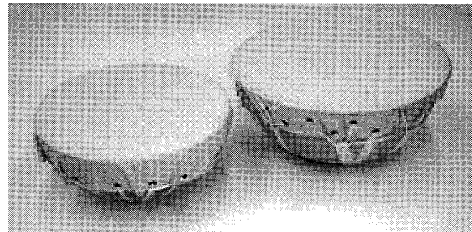
(12) 箱だiko



(13) 数珠玉を入れた箱



(14) ボール太鼓



(15) シェイプだiko

